

---

# **爆走国家イタリア＆アザーズ！！**

ゾダグア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

爆走国家イタリア＆アザーズ！！

### 【NZコード】

NZ86000

### 【作者名】

ゾダグア

### 【あらすじ】

『Axis Powersヘタリア』の登場人（？）物である國家達がミニ四駆で対決する話です。各自『爆走兄弟レッツ＆ゴー！－WGP』でそれぞれの国家の代表が使ったマシンを使い、熱い勝負を繰り広げます。

さあ、みんな一緒に3.....2.....1.....レディ、ゴーッ！

## (前書き)

この作品には私の政治・民族・文化的な主義・主張の類を発信するための物ではありません。あくまでレシゴ WGPマシンとアニメネタでヘタキャラを絡ませたいだけです。ですがお読みになると他の作品とは違った不快感を与える可能性があります。

また、私はここ10年以上ミニ四駆を触つておらず、現在の第3期ミニ四駆ブームにおける“普通”を分かつていないことと、話の都合で現役の方からすればおかしい点も多く見受けられると思います。

これらの注意を読んでなお読んでも良いと思われた方、私の作品を楽しんでもらえると嬉しいです。

某国某所。そこでは何人（？）もの国家がプラスチック製の構造物の周りで叫んでいた。

「行け、ベルクカイザー！」

「シャイニングスコーピオン、負けたら承知しないあるよー！」

構造物は灰色のプラスチック製部品が複数組み合わさって作られており、何本のレーンが並行して走っていた。いや、それはある物が走るためのものだつた。

各レーン上には高速で走る物体の姿。それぞれ色形は違うものの、モーター音を高らかに響き渡らせていく。それらは『ミーリング』と言つた。

これから話されるのは、国家たちがなぜこんなことをしているのか、そしてその結果引き起こされた事件である。

さあ、みんな一緒に…… 3 …… 2 …… 1 …… レティ、ゴーッ！

爆走国家イタリア＆アザーズ！！

事の発端はとある会議の後、日本の家を南イタリア　　ヴェネツィアーノとドイツが訪れた時にさかのぼる。

3人はコタツに入つて会話をしていたのだが、日本はその間ずっと作業を行つていた。何やらプラスチック製のパーツをランナーから切り出し、組み合わせているのだ。パーツの収められた箱には他に

「ゴム製のワニングやモーター、ネジなども入っており、機械工作と思しい。」

「あ～、日本。一体何をやっているんだ？」

キチンと会話には参加できていたために、最初ドイツは日本を注意しようとは思つていなかつた。だが、イタリアが興味饗々と言つた瞳で日本の手元を見るので、話が滞つてしまつたのだ。

ドイツの質問に日本は顔を上げて答えた。

「これですか？　ミニ四駆です」

「ミニ四駆？」

疑問府を浮かべるドイツに日本が口を開きかけた所で、イタリアが代わりに話しだした。

「あ、オレ知つてるよ。自動車のプラモデルで、電池で動かしてレースが出来るんだ」

大体の概要をイタリアが話す。それに日本は時折注釈を加えると、ドイツはミニ四駆の特性に関心をした。

「なるほど、エコカーの技術を応用した玩具か。中々興味深いな」「大体そう思つていただければ結構かと。しかし、出た順序は逆です」

「ツパーを使ってランナーからパーツを切り出しながら日本が訂正する。会話をしながらでもゲートを先にランナーから外してパツを切りだすあたり、日本の細かさがつかがえる。

「Jの趣味を理解して下さる方が増えるのは嬉しいことです。よろしければビーテオをさしあげましょ」

そう言って日本は少しの間席を外すと、何やらずりしつと重みのある紙袋を持って帰つて来た。

「とりあえずWGP　世界大会編までを持って来ました。MAXは口リ田乳のマリナたん萌えですが、まだロボロにダビングする作業が終わっていないので、また今度「すまんな」

「ねえねえドイツ、見終つたらオレに貸してよ」

と、Jのまではただの趣味の交流になるはずだったのだが……。

「日本、今度レースをしよう」

Jのなことを言いだしてしまつまでにドイツがミニ四駆にハマってしまったのだ。そのハマリ方はやや重症で、日本を訪れるたびに古本屋に寄つてミニ四駆についての書物を探すべし。

イタリアは借りる前に自分の中で吹き替えられて放映されていたヴァージョンを見ていたのでイタリア代表の登場時の悪役ぶりに文句を付けてきたものの、ドイツ程ではないがはまつてくれたようだつた。

「それでは、明後日の会期終了後に私の馴染みの模型屋に行きました。あそこならミニ四駆のパーツの品ぞろえも良いですね」

会議の休憩時間に枢軸トリオが話していると、アメリカがやつてきた。

「おい日本。聞いてくれよ  
って、何の本だい?」

ちょうどドイツがミーハイ駆改造ブック（今は「」と徳田ザウルス先生の漫画の載った貴重な書物である）を広げて、日本に見せてはいる所だった。2人（？）は真剣に話していくアメリカに気付いていいので、話の高度さについて行けないイタリアが代わりに答える。

「ああ。ドイツが三一四駆にハマっちゃってね、先輩の日本に色々聞いているんだ~」

アメリカはドイツの手から改造ブックを取り上げ、読み始める。

「くべ……！」因縁の車のおもちゃなんだな。

「構いませんよ。ただし、キットを差し上げるので自分で組み立て

元自動車生産TOPの実力を見せてやるぞ！」

」のようにアメリカのように布教される場合もあれば

「四駒」、「四轎冗雜」に出てくるおもちゃもあるな。受け立つある。

「// | 四駆は韓国が起源なんだぜー。『土屋レーシングファクトリ  
ー』?『The Racing Factory』が正しいんだ  
ぜー。」

と、国内で放映されているので既に知っていることもあった。で

は、その次のステップは？

「じゃあ、レースしようよ？」

当然こうなつた。

だが、ここである問題が起つた。大会をどこで開くかで、国民たちが揉めたのだ。前途の通りドイツなどは酷い凝りようだつたので、程度の差こそあれミニ四駆をたしなむ国家の国民はそれこそワールドカップやオリンピックのように盛り上がつた。ビジネスチャンスとばかりに禿鷹のよつてミニ四駆の“ミニ”の字さえ知らない金の亡者も群がつた結果……。

「第一回ミニ四駆世界大会は、シーケンでおおくりするですよー。」

国家ではないが、どこの国家にも属さないシーランド（本人は國家と主張）で開かれる事になつた。ちなみに無用な混乱を国家たちが嫌つたので、国家とシーランド国民以外は立ち入りを厳禁している。

『実況はこの俺イギリスと』

『解説を俺様、プロイセンが担当するぜ。ケセセセ』

今回の出場国は『爆走兄弟レツソ&ゴー！WGP』およびそのメディアミックス戦略の一環で発売されたゲームで代表が登場した国家である。はぶられた中の一人であるイギリスが会場から近いからという理由で、プロイセンが一番ハマつたドイツを身近にみていたせいでびみょーに詳しくなつたため、それぞれ貧乏くじを引かされることになつたのである。なお、他にも大会運営や撮影などの役割で何ヵ国かスタッフとして参加している。

『それではエントリーナンバー1番、日本。マシンはゼートマグナム』

『ハーフ四駆発祥の国の意地を見せられるか。あと、ヴェストの話だと堅実な走りをすることが多いのに、マグナムって言つのが気に入る所だ』

「やい日本、裏切りやがったなー。それに起源はオレなんだぜ!』

韓国の中間の声を聞きながら日本がコース前に進み出す。

『次、エントリーナンバー2番、イタリア。マシンはディオスパードだ』

『アニメでの怒りを胸に改造したらしいぜ。でも、カルロは妨害なしで烈とミハエル抜いたんだから、そう悪くない扱いだと思つぜ』

イタリアが日本の隣に立つ。なにやら、自信満々だ。

『エントリーナンバー3番、ドイツ。マシンはベルクカイザー（R型）』

『本当はコンビネーション走行で力を發揮するマシンだが、ヴェストの調整でそんなの気にならないくらいになつてゐる。日本と並んで優勝候補だと思つてゐるぜ』

ドイツは手の上のマシンを見つめながら、イタリアの隣に立つ。

『エントリーナンバー4、アメリカ。マシンはバックブレーダー』

『本来はリアルミニ四駆つつつてディスプレイ用のキットなんだが、アニメと同じようにNASAの技術を使って走れるらしい。今回で1番のチャートマシンな気がするぜ』

HAHAHAと高笑いしながらアメリカがドイツの隣に来る。

『エントリーナンバー5、韓国。マシンはハリケーンソニック』

『日本に文句言つたのが気になるな。

おい、坊ちゃん。ちょっと聞いてみろよ。ハンガリー、迷わないようひついていつてやれ』

日本、覚悟しろよ……。と、ぶつぶつとつぶやきながら恨みの視線を日本に送る韓国。彼が一步踏み出したところで、コース横の特設席からマイクを持ったオーストリアがカメラを担いだ不機嫌なハンガリーと共にやってきた。

「韓国、少しよろしいですか？」

「なんだぜ？」

「日本になにやら怒つているようですが、何かあつたのですか？」  
「良く聞いてくれたんだぜ！ アイツどどっちは烈と豪のマシンを使うか大会前に話しあつたんだが、その時日本のヤツ『それではハリケーンソニックはあなたに譲りましょ』って、言つたんだぜ。マグナム使つてのなら、今回はサイクロンマグナムが普通なんだぜ！ それをアイツは……」

それからしばらく韓国の怨嗟の声が続く。だが、その視線の先の日本は完全に無視するつもりのようだ。

『あ～……、キチンと話を聞けよつて所じやねえか？ イギリス、次行け次』

『え～、エントリーナンバー6は中国。マシンはシャイニングスコープオンだ』

イギリスはプロイセンに従い、次の中国を紹介する。

後はロシアのオメガ01、スペインのプロツケンG・ブラックス

ペシャル、フランスのショヴァリエ・ド・ローズと紹介がすすみ、最後にエジプトのピラミタルスフィンクスの紹介が終わって、出場選手10人がスタート地点についた。

『それではみんな、マシンをスタート位置に』

一斉に動力<sup>ポンジン</sup>に電源が入れられる。モーターの音が要塞内に響き、各マシン準備完了だ。

『カウントを取るぞ。5、4、3……』

イギリスのカウントが開始される。  
シグナル？ そんなものいちいち用意してられません。  
と、そこに乱入者が。

「ちょっと待つです！ シー君も参加するのですよ」

そう言つてシーランドがエジプトの隣のレーンについた。  
イギリスが他のスタッフとシーランドを参加させて良いのか話始める。

「イギリス、別にいいじゃないか。どちらにしろ俺が勝つんだ」「珍しくアメリカくんと意見が合つね。でも、勝つのは君じゃないよ」

「はよしないとバッテリーがあがつてしまつよ～」

他の参加国はどうやら認める様だ。  
イギリスも司会席に戻る。

『それじゃあ3カウントで行くぞ。

3、2、1、Go Shoot!』

全11台のマシンがレーサーの手から飛び出す。障害のあるコースを周回するので、スタートーを速やかに撤去するスタッフ(リトアニア)。

開始の合図がおかしい? イギリスはブレーダードだから良いんだよ!

『さあ、全マシン一斉にスタートだ! 先頭を行くのは……ドイツのベルクライザ。その後を日本のビートマグナム、スペインのブロッケンG、と続く。残りのマシンは一進一退を繰り返している』

といひでと、イギリスはプロイセンに訊ねる。

『ところでシーランドのマシン、あれはなんて名前なんだ?』

シーランドのマシンはスペインのブロッケンG・ブラックスペシャル同様、フロントに積まれたモーターが露出しているのが特徴の青いマシンだ。

『ああ、あれはガンプラスターXTO。南米チームのマシンだが……劇場版で要塞の中を走り回っていたからってチョイスだろうな』

ガンプラスターXTO。爆走兄弟レッツ&ゴー!!の劇場版登場マシンである。GPチップの暴走によつていろいろと迷惑をかけ、ビクトリーズの活躍で無事持主のレオン少年の下に戻つている。といういわくつきのマシンだ。

『さあ、最初の難関、芝生エリアに先頭グループが入つたぞ。これ抜ければ直線だ』

ベルクカイザーを抜いたマグナムが縁の人工芝の敷かれたエリアに突入すると、一気に減速した。すぐにベルクカイザーが追いつくが、こちらも減速してしまった。

「く……大径タイヤにするべきでしたか」

他のマシンも続々と突入して減速していく。中でも、シャイニン・グス・コーピオンの減速は酷かつた。一気に最後尾へと落ちて行く。

「く……。しかし、まだ挽回できるある」

「行けえ！ ディオスパー・ダ。『アディオダンツア』！」

イタリアの指示を受け、ディオスパー・ダの「クピット」が怪しく光つた（（と、スタッフをやつっていたフィンランドは語る）。そして、シャーシから刃物が展開したではないか！

「あんな凶器積んでるなんて反則じゃねえのか？」

イギリスの突っ込みを聞いているのかいないのか、イタリアは自慢をしあげます

「どうだい？ この前ジユリアー・二さんに頼んで改造してもらつたんだよ。でも、攻撃には使わないから安心してね」

「みんな変な改造してるみたいだし、他のマシンの妨害しなけりやいいんじやね？ イタリアもああ言つてることだしよ」

「どうやらこの改造は認められたようだ。」

さて、ディオスパー・ダは刃でコース上の人工芝を刈るかと思いきや、スルーしていた。刃の設置位置が芝より高いのだ。その上、イ

タリアにとつては不幸なことに、重心が移動したことでバランスが崩れたマシンは不安定な動きを見せていた。

「え？」

疑問府を浮かべるイタリアに、ドイツが言つ。

「イタリア。一人で踊つていで、楽しいか？」

そのまま後からディオスパークはプロツケンG、バツクブレーダー、ガンプラスターというように他のマシンに抜かれて行つたのだつた。

『ヴァースト……お前がミハエルやつても似合わねえよ』  
「まひ」といてくれ、兄さん

× × × × × × × × ×

さて、トップ集団は芝生エリアを抜け、直線エリアに入っていた。

「バックブレーダー、『パワーブースター』だ！」

と、ここでアメリカが腕時計からロッテドアンテナを伸ばし、叫んだ。するとバックブレーダーが猛烈に加速したではないか。

「HAHAHA！NASAの技術をあんまり使わないで完成した、

『パワー・ブースター』の効果を見るんだ!』

バックブレーダーはあつという間にガンブロッスターとブロックンGを追い抜き、先頭集団に追いついてきた。そして、トップに躍り出た。

「！」のままゴールまで突っ走ってやるぞ!』

嬉しそうに叫ぶアメリカは、そのまま直線コースを突っ走って行つた。

× × × × × × × ×

「ガンブロッスター、いくですよ!』

「なんの。お兄さんのシユヴァリエ・ド・ローズだつて負けてらんないよ!』

さて、アメリカが一躍トップに躍り出た影で、イタリアを除いた他のマシンたちも芝生エリアを抜けて直線エリアに入つていた。皆同じような速度で抜きつ抜かれつを繰り返していたのだが、その中であるマシンがぐんぐんと速度を上げていた。中国のシャイニングスコーピオンである。その高速走行はボディの青い部分が空気との摩擦熱で赤く変わるという、ゲームでのあり得ない設定を再現していた。

「我の高速セッティングと、中国四千年の秘儀を見るがよろし!』

原作では、ジートマグナムとも拮抗したシャイニングスコーピオンの高速走行。どうやら、トルクよりモーターの回転数を上げての高速走行に重点を置いたセッティングだつたらしい。その加速は凄まじく、バックブレーダーのパワーブースターに匹敵するかも知れない。

「はあああああ

……」

レーサーの中国は何やら額に汗をびっしりと流しながら足を止め、太極拳の様な動きをしている。マシンに置いていかれてるが、いいのだろうか？

『あ～、中国。お前マシンはほつといて良いのか？』

「別にレーンの上を走っているのだから、一々追う必要はないある

コースアウトした時に回収するためとこいつ畠田であるが、一緒に走るのはぶっちゃけアニメのマネに過ぎないのである。一応レーザーはローラーブレード装備済みであるが、それだって疲れるのだ。

× × × × × × ×

視点は再び先頭グループへ。

トップのバックブレーダーはローラーもないのに「ローナーを余裕で曲がると、そのまま直線を爆走。第2の障害のループコースと、コースも難なく越え、第3の障害である急角度の坂に到達していた。

だが、ここでトラブルが起きる。

「しつかりするんだバックブレーダー！ 君はヒーローだろ？」

バックブレーダーが坂を登れないのだ。

これには理由がある。パワー・ブースターは凄まじい速度を出すことができるが、電力をものすごく消費するのだ。そのため、バックブレーダーが坂に到達する頃には電力を使い過ぎていた……という訳だ。

「く……『パワーブースター』だ！ がんばれ！」

アメリカが何度も指示を出すが、腕時計型通信機に表示されたバックブレーダーのコンディションは既に『Power Boost er ON』となっている。一応坂の途中までは行くのだが、何度もずり落ちている。

「アメリカ、ようやく追いついたぞ！」

ついにベルクカイザーが追いついた。すぐ後ろにはマグナムも居る。レンン集約エリアに入っているため、マシンはバックブレーダーのすぐ横を通りを行つた。

2台とも苦しそうだが、坂を確実に登つている。

「お先に失礼します」

そして、2台は登り切つた。

「お、アメリカが見えてきたあるな

ブロッケンGも抜いたシャイニングスコーピオンと、何故か自転車に乗り、香港と台湾と共に曲芸運転をしている中国も追いついた。高速型のシャイニングスコーピオンも苦戦はするが、速度が落ちていないのでそのまま登り切った。

「じゃ、先に行くあるよ。

台灣、香港。自転車、シーチー謝謝ある」

自転車を台湾と香港に任せ、中国はコース横を走る階段を登つて行つた。

その後もブロッケンGとガンブランスターはフロントモーターのおかげで樂々と坂を登つて行き、シユヴァリエ・ド・ローズ、ハリケーンソニックと続々と追い抜いて行く。

「やつたー！ アメリカに追いついたぞ！」

ついにはディオスペーダまで追いついてきた。どうやらナイフは収納したようだ。

「く……最後尾のイタリアにまで……」

アメリカはその場にへたり込み、歯噛みする。彼にイタリアは話しかける。

「おちつけハマーD……じゃなくて、一体どうしたの？」

「笑ってくれよ。俺は調子に乗りすぎてパワーブースターを使い過ぎた。そして、電池不足で坂も登れないのさH A H A H A……」

「それなら、俺に任せてよ。ディオスペーダ、アディオダンツア」「WHATS-!？」

何を考えたのか、イタリアはディオスпардаに指示し、ナイフを展開。そしてバックブレーダーの後部に突っ込んで行くではないか。原作同様の凶器攻撃。それが今起ころうとしていた。

『イタリア！？ 一体何を考えているんだ！』

だが、皆の予想した恐怖の瞬間は訪れなかつた。

「へ？」

なんと、ディオスпардаは刃をバックブレーダーとコースとの間に差し入れ、そのまま坂を登り始めたではないか。

「上へして上まで運んであげるよ」

「一七一七」としているイタリアに、蒼白になつていたアメリカが訊ねる。

「どうして……こんなことを？」

「そりやあ、楽しみたいから、かな？ ドベだつていいから、アメリカも完走しようよ」

坂の上に上り詰めるとディオスпардаは刃を収納。そしてバックブレーダーを追い抜いて行つた。

「それじゃあね～！」

ぼうっとしているアメリカ。だが、すぐに笑みを浮かべるとバックブレーダーに指示を出した。

「まだだよな。まだ走れるよな、バックブレーダー？」

バックブレーダーはモーター音で答えた。

× × × × × × × ×

『難所の坂を抜け、トップを争うのはシャイニングスコーピオンとベルクカイザー、そしてマグナムの3台だ！その後をFMマシン2台、ソニック、フランス野郎、ピラミタルスフィンクスと続いているぞ！』

坂を越えると再びレーンが区切られ、第4の障害『連續ヘアピン』に各車至っていた。直線セッティングのシャイニングスコーピオンは再び減速している。

「ここで俺の本領発揮だぜ！」

ここでソニックが持ち味を生かした華麗なコーナリングを繰り返し始めた。

ちなみに峰だと、直線で勝つっていてもカーブで抜かれるという事は実力が下という事らしいけど、ミニ四駆だとそんなことはないよ。

「ソニック、『ハリケーンパワードリフト』だぜ！」

韓国の指示を受け、ハリケーンソニックは凄まじい速度でのコーナリングを行っている。その姿はまさに、原作での烈の走りを体現

していれるといつても良いだらう。

「 ジジもコーナーが得意なんや！」

プロッケンGも凄まじいコーナー速度を見せ、追いすがる。

「 やりますね。では、私も奥の手を出しましょ。『マグナムダイナマイト』！」

日本が何やら必殺技らしき単語を叫ぶ。するとびりだりう、ビートマグナムはコースから飛び出したではないか。

『 おーっと、日本がここでコースアウト。失格か！？』  
『 いや、あれは……』

コースアウトしたマグナムはそのまま飛び続け、カーブをいくつかスキップして着地した。

「 どうです？ スーパービートシャーシを再現したビートマグナムの力は」

少し誇らしげな日本にドイツが申し訳なさそうに突っ込みを入れる。

「 公式大会だとレギュレーション違反だな」

レーサーは少し落ち込んでいるが、マグナムは他を引き離して大幅にリード。そして次の障害に辿りついた。

『 一躍トップに躍り出たマグナム。今、第5の障害『擬似オフロー

ドエリア』に到達だあ！

なあプロイセン。ただの地面にしか見えないんだが……『いや、それが曲者なんだ。このエリアの担当は……カナダとキューバか。粹な真似をしてくれるじゃねえか』

障害エリアに入った瞬間、マグナムの走りが荒くなつた。ガタガタと車体は不安定に揺れている。

『レーサーミニ四駆で参加しているヤツが居れば、面白ことになつたんだがなケセセセ』

追いついてきたシャイニングスコーピオンとハリケーンソニックもかなり減速している。シャイニングスコーピオンは、かなり顕著だ。

「ビートシャーシのサスペンションは伊達じやありませんよ」

ほくそ笑む日本。

速度は落ちながらも、マグナムは他のマシンと比べて安定性が高かつた。

普通、スーパーテンシャーシは車高が低くなるため、オフロードではタイプ1などのRCを元にしたシャーシより走霸性が低いのだが、スーパービートシャーシを再現したと言つだけあってサスペンションが効いているのだらう。

「俺もバスター・ソニックにすればよかつたぜ」

ビートシャーシの改良型シャーシを使っているバスター・ソニックならば、大型のサスペンションを使用しているためにビートマグナ

ムに拮抗した走りが期待できたり。だが、日本の独壇場とはいかない。

「ようやくトップがみえてきたですよー。」

「悪いけど、兄ちゃんもそう簡単に負けられないんや」

両車ともトルク重視の設定なのか、FMマシンが追いついて来たのだ。

『トップは依然としてマグナム。しかしガンブラーとブロッケンGも迫っているぞ。』

ん？ あれは……』

× × × × × × × ×

その頃、途中集団は連續ヘアピンで抜きつ抜かれつを繰り返していた。

「なんだかお兄さんハブられているけど、そう簡単に負ける気はないんだよ」

「僕だって、君に負ける気はないよ。まあ……アメリカくんには完膚なきまでの勝利が決定してるから問題ないけど。」

「……」

これが氷や砂漠コースなら話は違つてくるのだが、実に拮抗した勝負を繰り広げている。

そこへ後ろから凄まじい速度で迫ってくる一枚のマシンが。

「ようやく追いついてきたよ」

ディオスペーダである。なんだか、ストレートより早い。  
何故こんなに加速したのか。その理由は……

「ナイフを投棄したらこんなに軽くなるんだもんな」

ナイフを外したからだつた。なんと、ジュリアーナんは、ナイフの強制<sup>パージ</sup>排除機能を装備してくれていたのだ。

『装備の排除機能？ そんなの当たり前だろ。ドリルと自爆装置がつけられなかつたのは残念だけどな。がつはつはつは』

フランスのショヴァリエ・ド・ローズとロシアのオメガ01、そしてエジプトのピラミタルスフィンクスの横を華麗にパス。

「「あ、」「  
「……」

そのままアビンを抜けたのであった。

× × × × × × × ×

先頭集団はオフロードを抜け、最後の難関へと到達しようとしていた。

「間もなくゴールですね……」

「ああ。だが、負けはしない」

マグナムとベルクカイザーがオフロードを最初に抜け、ゴールが視認できるところまでやつてきた。2台ともトップスピードで一歩も引かない。

このまま2人がゴールか、誰もがそう思った。

「「…?」」

日本とドイツは自らのマシンの姿が急に消えたことに驚く。2人はそのまま駆けて行くのだが、急に道がなくなつて落ちた。ドイツはなんとか踏みどりましたが、日本は……

「アーサー キャーン フラアアアイツ！」

と、言つて落下したのだった。

「親方！ 空から日本が落ちてきた！」

「何言つてるんですか……？」

まあ、下でバルト三国がトランポリンを広げてくれていたので大丈夫だつたけどね。

だが、二人のマシンは空を舞つていた。

「飛べ！ 飛ぶんだ、ベルクカイザー！」

ドイツさんがかなり無茶なことをおっしゃっていますが、要塞内の換気扇から生み出される風でマグナムとベルクカイザーは空中で流される。

『マグナム、ここでコースアウトオオー!』

そしてマグナムはコース外へ落下。

『ベルクカイザーは、なんとコースを逆走し始めたぞ!』

下を走っていたコースに落ちたは良いが、風で向きが返られたせいで逆走し始めたのだった。

「ベルクカイザー。戻れ、急いで坂の下まで戻るんだ!」

ドイツはマシンを坂の真下のレーン集約エリアに急がせる。その間に後続車達は速度を落として飛ばされないように坂を下っていた。  
『ディオスпардаだ! 芝生エリアで優勝争いから脱落したと思われていた、イタリアのディオスпардаが、ここで追い付いてきたぞ!

その隙にディオスпардаが先頭集団に切迫していた。

「あれ、みんなは?」

しかし、彼には日本とドイツの失敗と、後続マシン達の対策を見ることが出来なかつた。

「えええええつ!?

その結果彼も、ドイツと日本と同様に空を舞つたのだった。

『うわあっー？』

階段をゆつくりと下つていた他の国家達の上に落下するイタリア。ディオスパーーダは、ディオスパーーダは一体どうなったのか。国家達がディオスパーーダに注目する。空を舞つたディオスパーーダは、風に乗り、何とレーン上に着地した。

『えええええええつー！？』

そのままゴールイン。第一回国家対抗III-四駆レースはイタリアー（ヴェネチアノ）が優勝の栄冠を手に入れたのでした（まる）

× × × × × × × ×

アメリカは、ゆつくりとバックブレーダーと並走していた。

マシンの電池残量が少なく、並歩と言つたほうが良いような速度だつが、たしかに並走していた。

「遅くてイライラするんだぞー！ いつそのことリタイアした方がいいんじゃないかな？」

途中で何度もそう思つても、イタリアが助けてくれたことを思いだして耐えた。

もう速度を要する障害はないので、何とかバックブレーダーも走り続けられた。

『がんばれ、アメリカ』

実況をやっているイギリス、そしてスタッフ達も応援しました。

「WOW！ その速度で行くんだ、バックブレーダー！」

最後の坂道で位置エネルギーの助けを借りて速度を上げ、ゴールは目前。

『アメリカ、完走だああつ！』

そしてバックブレーダーは、ゴールラインにフロントタイヤが乗る位置で、停止した。

「　「　「おめでとう、アメリカ」」

ゴールには他の国家レー・ザたちが居て、アメリカを出迎えた。だが、アメリカは彼らに礼を言いつと、コースに入る。そして彼はマシンを手に取った。

車体を動かすまではなかつたようだが、タイヤがゆっくりと回っている。車体底にあるスイッチを切ると、タイヤの動きも止まった。

「ありがとう、バックブレーダー」

おわり

(後書き)

この度は私の小説のみならずあとがきにまで手を通していただき、ありがとうございます。

私はいつも、一体どこに需要があるか分からぬような物を衝動的に書いてしまうのですが、この作品もそう言つた一つです。しかし、興味を持っていただけのなら、さらに楽しんでいただけたなら幸いです。

今後も、この方針で書き続けていくので、また機会がありましたら私の作品にあなたの時間を少しだけください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8600o/>

---

爆走国家イタリア＆アザーズ！！

2010年11月12日03時07分発行